

聖書日課 『からし種』 2024.5.26—6.2

<p>5月26日 (日) コヘレト 8章</p>	<p>「にもかかわらず、わたしには分かっている。神を畏れる人は、畏れるからこそ幸福になり、悪人は神を畏れないから、長生きできず／影のようなもので、決して幸福にはなれない」(12・13節)。次節でも「空しいことが起こる」と語りながらも、コヘレトは主を信頼している。彼は伝道者であり、地上での労苦を受け入れ、主の賜う恵みを喜ぶことを勧める。</p>
<p>27日 (月) コヘレト 9章</p>	<p>「何によらず手をつけたことは熱心にするがよい。いつかは行かなければならないあの陰府には仕事も企ても、知恵も知識も、もうないのだ」(10節)。情報が満ち溢れ、その中で右往左往してしまうような現代。主の道への招きをいただいた恵みに感謝して、迷うことなく熱心に主の道を歩み続ける者でありたいと祈る。</p>
<p>28日 (火) コヘレト 10章</p>	<p>「賢者の口の言葉は恵み。愚者の唇は彼自身を呑み込む」(12節)。日々多くの言葉を口にする。時候の挨拶、他愛のない雑談。時に何気なく口にした言葉が人を、また自分を傷つけてしまうことがある。「あなたは、自分の言葉によって義とされ、また、自分の言葉によって罪あるものとされる」(マタイ 12:37)。自らの唇が恵みの言葉を語る日々でありたい。</p>
<p>29日 (水) コヘレト 11章</p>	<p>「風向きを気にすれば種は蒔けない。雲行きを気にすれば刈り入れはできない。…実を結ぶのはあれかこれか／それとも両方なのか、分からないのだから」(4・6節)。収穫直前の果実が風に飛ばされる。雨が少なく、あるいは多すぎて収穫が減少する。どれほど技術が進もうとも、風も雨も陽の光もわたしたちには制することができない神の業。</p>

聖書日課 『からし種』 2024.5.26-6.2

<p>30日 (木)</p> <p>コヘレト 12章</p>	<p>「すべてに耳を傾けて得た結論。『神を畏れ、その戒めを守れ。』これこそ、人間のすべて」(13節)。コヘレトの語る「空」とは、何だろうか。自らの力に依り頼んで手にした結果を得て、自分を知恵ある者として世の中のすべてを見極めた時、決して神に及ぶことの無い「人」の弱さ、不完全さを思い知った空しさではないか。「神を畏れ」ることこそがすべて。</p>
<p>31日 (金)</p> <p>雅歌 1章</p>	<p>「あなたの香油、流れるその香油のように／あなたの名はかぐわしい。おとめたちはあなたを慕っています」(3節)。キリスト者にとって、最もかぐわしく慕わしい名は「キリスト・イエス」。限りない愛でわたしたちを愛し抜いてくださったイエスの「互いに愛し合いなさい」(ヨハネ 13:34)との呼びかけを、わたしはいつも心に刻みつけているだろうか。</p>
<p>6月1日 (土)</p> <p>雅歌 2章</p>	<p>「エルサレムのおとめたちよ／野のかもしか、雌鹿にかけて誓ってください／愛がそれを望むまでは／愛を呼びさまさない」と(7節)。愛は、ことさらに掻き立てたり、揺り起こしたりして呼びさますものではない。時を待ちながら、しっかりはぐくまれていくもの。野のかもしかは、愛がはぐくまれる時を心得ているのだろうか？人は自分の愛をわきまえているだろうか。</p>
<p>2日 (日)</p> <p>雅歌 3章</p>	<p>「彼らに別れるとすぐに／恋い慕う人が見つかりました。つかまえました。もう離しません」(4節)。愛は、恋い慕う相手と共にあることを切に求める。相手の存在が深く自分の体の一部になっているから。同じように、神は私たちと共にあることを切に望まれ主イエスを送ってくださった。私たちを見つけ出し、礼拝に招いておられる方の熱い招きを覚えて共に集おう。</p>